

二〇二五年度

トキワ松学園高等学校入学試験

国語第一回

問題用紙

受験番号

開始と同時に受験番号を
書き入れなさい。

次の①～⑤の――線のカタカナを漢字に直し、⑥～⑩の――線の漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 他人の意見をケンキョに聴く。
- ② メールに頼まれた画像をテンプする。
- ③ 入賞者に記念品をゾウテイする。
- ④ 彼女は明るいフンイキで仲間を和ませる。
- ⑤ オダやかな毎日を過ごしたい。
- ⑥ 友人を誕生日パーティーに招待する。
- ⑦ 休日に神社の境内を散歩する。
- ⑧ 彼のおかげで円滑に物事が進んだ。
- ⑨ ピアノの演奏を聴きに行く。
- ⑩ 頼まれた仕事を快く引き受ける。

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。(問いの下の数字は、本文での行数を示します。)

イギリスの歴史家サイモン・シャーマは2005年に邦訳された『風景と記憶』で、「風景は自然である前に文化である」と述べている。たしかにそうだ。「山^X水明」というが、これは山が陽の光の中で紫色に霞み、川が澄みきって美しく見えることを指している。美しい自然の風景を表す言葉であるが、山はいつも紫に見えるわけではない。日本人の心にこの色が清浄な美しさを示すのである。《Y》の『枕草子』の冒頭も、「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」と記されている。^①世界の色は土地の文化に染められた人の心を表すのかもしれない。私が長く暮らしたアフリカの熱帯雨林で、いっしょにゴリラの調査をした地元の人に絵を描いてもらったことがある。何と人物は紫色に、ウシは赤色に塗られていた。私から見たら地元の人や黒牛は黒色に、ウシは茶色に見えるのだが、彼にはそんな色に見えるらしい。私と彼で視力が違うはずがない。文化のフィルターを通して見る世界の色が違うのだろう。(中略)

日本でも時代によって移り変わる景色がある。日本の原風景といえは西日本以南にある^{注1}照葉樹林である。しかし、1914年に文部省唱歌として発表された「故郷」は、「兎追ひし彼の山、小鮒釣し彼の川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷」となっており、これはまさしく田園の風景だ。田園は米作が始まって開かれたものだから弥生時代以降であろう。ただ、今でも神社はクスノキやシイノキなど照葉樹林に覆われている。日本人が神々の聖なる場所として拝む神社には縄文の原風景が、暮らしの中心には弥生以降の原風景が宿っているのかもしれない。その田園風景も急速に変わりつ

つある。私たちの心にあるのは茅草^{かやぶ}きの屋根とたんぼのあぜ道、れんげの咲く春の田であり、ドジョウやゲンゴロウが泳ぐ夏の小川、黄金色に実る稲穂と刈り取られた田んぼの秋の風景である。しかし、都会から車で畑に通い、温室栽培が流行^{はや}り、自動耕運機や田植え機が活躍する昨今、^②そんな風景はもうどこにもなくなるかもしれない。

それでも時代によって変化する風景を超えて、^③欧米と日本ではそもそも自然の見方が違うようだ。それを指摘したのは20世紀前半に活躍^{注3にすぎたろう注4わつついてつう注5いまにきんじ}した西田幾多郎、和辻哲郎、今西錦司という日本の思想家たちであった。

欧米の伝統的な考え方では、主体である人間と環境である自然は明確に区別される。人間以外の生物は自然の一部であり、言葉と意識を持つ人間だけが自然を計画的に改変できる。すべては自然の法則にしたがって動いており、生物はその自然の動きに適応するように進化してきた。人間だけが自分たちの意思で自然を作り変えることができ、それを神から与えられた権利と義務だと考えてきたのである。^{注6}デカルトの「われ思う、故にわれあり」という言葉は、世界の存在をどこまで疑ってみても、それを疑っている自分は疑うことができないことを意味する。すなわち、自己の意識こそがこの世界を成り立たせている根拠だというのである。これを「主語の論理」という。英語やフランス語では文章には必ず主語がある。誰が主体であるかははっきり示さねば、その文章が示す世界がわからないからである。

これに対して日本語は「述語の論理」によつて構成されていることが多い。 A、「昨日は遠足だった。バスでトン

ネルを抜けると秋の紅葉が真っ盛りだった」という文章を見てみよう。この主語は当然「私」なのだが、^④どこにも「私」という語はない。紅葉を見たのは「私たち」かもしれないし、あるいはそれを見た友達から聞いたのかもしれない。でも、主語がなくても私たちにはその情景がわかる。 B、日本語は見ている者がその風景に溶け込んでいると見なすからだ。

それが自分であろうと誰であろうと構わない。要はその風景に一体となった自分を感じられるかどうかということだろう。

西田は、人間を含むすべての生物は環境と切り離すことができないと考えた。西田の言葉を借りれば、「科学的態度とは、対象を見ている主体があり、その主体から切り離された対象があり、主体がその対象を観察して分析することで生み出される」。環境を客観視できるからこそ、近代科学は人間の都合のいいように環境を大幅に改変することができたというのである。近代科学は時間を単に空間化して（直線と点に置き換えて）幾何学的に見てきた。しかし生物は常に動いている。生きるという働きに立脚して見るならば、その働きは行為的に見られるものでなければならない。生命における時間というのは、生きる行為にとって直観的に感じ取られるものであるはずだ。生物は時間と空間という相異なる現象を同時に直観的に感じるができる。そう捉え、主体である自分を周りの環境から独立した存在と見るのではなく、関係性の網の目の中にいると見なす。西田がすくい取ったのは日本の伝統的な感性である。

和辻も自分が旅した世界をモンスーン、砂漠、牧場という3つの「文化圏」に大別し、「風土が人間の自己了解の仕方である」と述べている。ここでいう「風土」とは環境でも風景でもなく、そこに暮らす人間と一体になったものであり、人間の精神世界の表象であるといってもいい。これも「【Z】の論理」といっていいだろう。

今西は、すべての生物はもともとひとつのもののから分化したのだから、互いに認め合う能力を持っているはずであると見なす。そこには「認め合いの起こる場」がなければならず、それがそれぞれの種の生物と一体となった環境だというのである。その場とは、単なる生活空間といったものを指すのではなくて、どこまでも生物そのものの継続であり、生物的な延長をその内容としていなければならない。「絶えず働かねばならぬ生物の生活とは、環境の同化であり世界の支配であり、それは結局生物に具^{そな}わった主体性の発展ということにほかならない」「変異ということそれ自身もまた主体の環境化であり、環境の主体化でなければならぬ。生きるということの一表現でなければならぬ」と述べている。（中略）

先の3人の日本人思想家のうち昆虫少年だったのが今西錦司である。今西は成長してから昆虫を集めて標本箱にとどめている自分の行為を「死物学」と反省し、これからは生きている生物の研究「生物学」をやろうと決心したと述べている。生物を分類しようとすれば、その動きを止め、身体を部分に分けて比較しなければならない。C、それでは生物を部分的に理解したことにしかならない。^{注7}分類学に限らず、生態学^{注8}も生理学^{注9}も行動学^{注10}も、生物のある動きや働きを取り出して分析をする。それでは生物の本質である「生命の流れ」や「未来を先取りする」能力を知ることとはできない。生命とは「絶えず動くもの」なのである。

今西は1980年代になって「自然科学」ではなく、「自然学」^⑤をやろうと宣言した。自然を要素に分け、その機能を調べる自然科学は、生命の流動する関係を静止したものとして切り取り、操作可能なものとして人為的に作り変えようとした。部分に分けず、全体を丸ごと理解することが必要だというのである。そのためには、「関係性」と「流れ」に目を留める必要がある。地球という関係のネットワークを通じて、エネルギーや物は循環しながらその安定を保っている。^⑥客観的に物事を観る前に、関係のただ中に踏みとどまり、さまざまな立場に立って物事の行く末を判断する視点を持たねばならない。それにはまず、客観主義的な、還元主義的な考えを改め、人と人、人と自然^⑦のつながりを再認識することが必要だ。これまで私たちは西洋発の自然科学の手法にしたがい、自然から距離を置き、自然を操作可能なものとして認識し、^a搾取し利用してきた。果ては人間自身も、自分の臓器や心までも客観的に眺め、それを改造しようとしてきた。その際、私たちがとった方法は対象を分類して部分別に切り分け、それらを徹底的に分析してそれぞれの機能を高め、ある目的のために統一して機能を発揮させるように仕向けることだった。しかし、自然も人も部分に切り分けられるものではなく、すべてがつながり合って影響を与え合っていると考えるべきなのである。

今西の自然学にしたがえば、人間も他の生物も環境に働きかけることによって主体性を持っている。そして、生物どうしはその場を共有しつつ直観を用いて認め合い、棲み分けている。それを感じられる能力、D 共感力を人間はとくに高めてきた。それを人間に対してだけ用いるのではなく、同種の仲間、異種の生物へも発揮して、多様な生物が広く共存するコミュニティを新たに作らねばならないのではないだろうか。

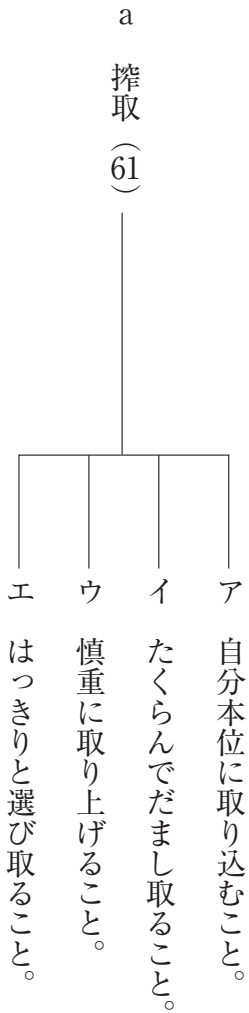
現代は情報化によるグローバルな時代である。今後ますます物や人の動きが加速するだろう。すでに世界の半分以上の人口が都市に住んでいる。しだいに人々は自然から距離を置き、技術や人工的な環境に依存する度合いが強くなるだろう。しかし、情報だけに依存して行為を決めるのではなく、自然の動きに絶えず目を留め、それを心身で感得することが必要だ。SNSは通信手段として利用されるだろうが、コミュニティには「認め合いの起きる場所」が不可欠だからである。その場所はインターネット上のヴァーチャルな空間ではなく、自然が豊かで、画一的な予想ができないものである必要がある。生物としての人間は何百万年も自然の一部として心身を鍛えてきた。未来のコミュニティは個人がそれぞれ個性を持った存在として認め合わなければならず、そのためには個性を発揮できる多様な環境が不可欠である。インターネットの均質な空間と違い、常に姿を変え、時間とともに移りゆく自然は私たちの予想を裏切り、人々の直観力を導き出して個性を発揮させる。そこに新たな創造が生まれる契機が潜んでおり、コミュニティを刷新させ活気づかせる原動力がある。私たちにとっての風景は文化のフィルターを通した自然である。しかし、だからこそ反作用として自然は文化を創り、文化が私たちの情緒を作る。心と一体になった自然をどのように守るか。それは科学技術ではなく、私たちの感性に大きく依存しているのである。

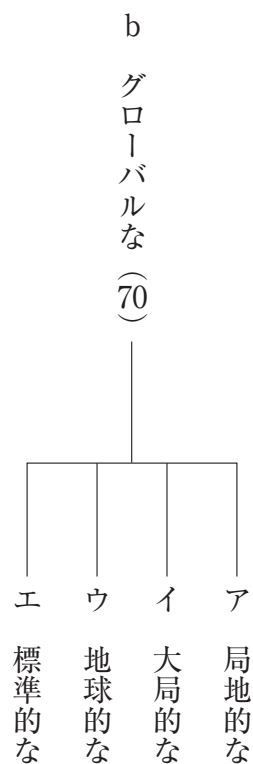
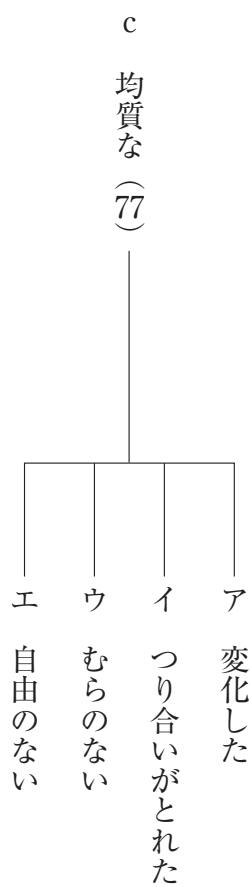
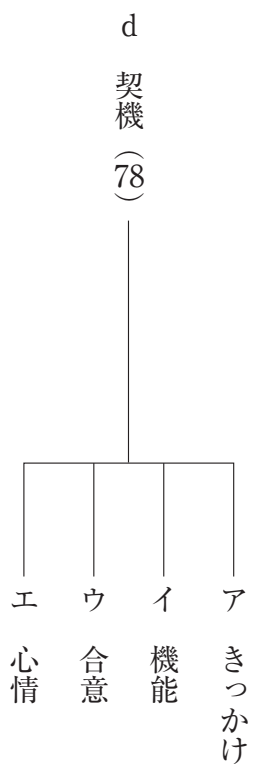
(山極寿一『森の声、ゴリラの目 人類の本質を未来へつなぐ』問題作成のため一部改変しました。)

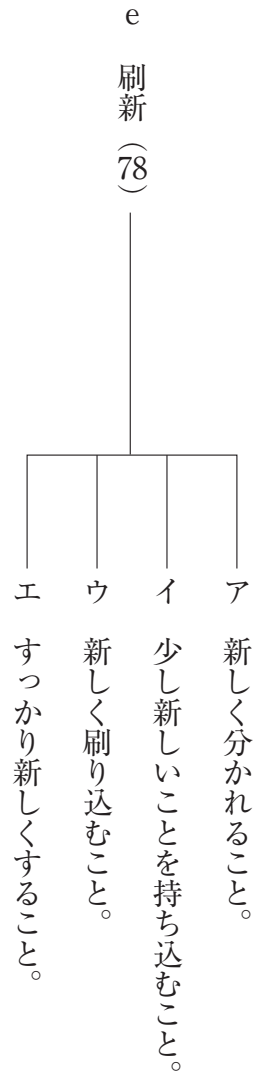
- 注1 照葉樹林……常緑広葉樹を主とする樹林。
- 注2 自動耕運機……自動で田畑の土を掘り返しながら砕く農業機械。
- 注3 西田幾多郎……にしだきたろう日本の哲学者。「西田哲学」を確立し、西洋哲学にも影響を与えた。
- 注4 和辻哲郎……わつじてつろう日本の哲学者・倫理学者・文化史家・日本思想家。
- 注5 今西錦司……いまにしきんじ日本の生態学者・文化人類学者。動物社会学・進化論を掲げた。
- 注6 デカルト……フランスの哲学者・数学者。
- 注7 分類学……生物を形態・生理などの関連やつながりに基づいて整理し、相互関係を研究する学問。
- 注8 生態学……生物の生活に関する科学。
- 注9 生理学……生命現象を物理的、化学的手法によって研究する学問。
- 注10 行動学……動物の行動を研究する学問。

問一 線 a～e の言葉の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で

答えなさい。(61、70、77、78)







問二 空欄 X に入る漢字一字を本文中から抜き出して答えなさい。(2)

問三 空欄《 Y 》に入るのは「枕草子」の作者名です。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。(4)

ア 紫式部 イ 兼好法師 ウ 松尾芭蕉 エ 清少納言

問四 ———— 線①「世界の色は土地の文化に染められた人の心を表すのかもしれない」とありますが、なぜそのように考えたのですか。本文中の言葉を使って理由を説明しなさい。(5・6)

問五 ——— 線②「そんな風景」とはどのような風景のことですか。本文中から七十字以内で探し、最初と最後の五字を答えなさい。(17)

問六 ——— 線③「欧米と日本ではそもそも自然の見方が違うようだ」とありますが、欧米と日本の自然の見方をそれぞれ本文中の言葉を使って説明しなさい。(18)

問七 空欄 A B D に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。(27、30、51、67)

- ア しかし イ 例えば ウ さらに エ すなわち オ なぜなら

問八 —— 線④「どこにも『私』という語はない」とありますが、その理由として誤っているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。(28・29)

ア 日本人は、見ている人が見ている風景と一体になっていると考えるから。

イ 日本人は、その風景を見ている人が誰であるかは特に問題視しないから。

ウ 「秋の紅葉」は日本人にとって常に目に入る当たり前のものだから。

エ 日本人にとっては、その風景は人から聞いたものであっても構わないから。

問九 空欄【Z】に入る言葉を本文中から抜き出して答えなさい。(42)

問十 —— 線⑤「自然学」とありますが、今西が述べている「自然学」とは「自然科学」とどのようなところが違うのですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。(55)

問十一 —— 線⑥「客観的」の対義語を漢字で答えなさい。(58)

問十二 —— 線⑦「人と自然」とありますが、筆者はこの二つの関係についてどのように考えていますか。「〴〵考えている。」に続くように、本文中から四十五字以内で探し、最初と最後の五字を答えなさい。(60)

問十三 —— 線⑧「情報だけに依存して行為を決めるのではなく、自然の動きに絶えず目を留め、それを心身で感得することが必要だ」とありますが、この部分の具体例として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。(72・73)

ア 海や森などに自ら足を運び、生き物と触れ合うことでその場の空気を感じることが大切である。

イ SNSで他者とやりとりをするばかりではなく、一人の時間も大切にすべきである。

ウ 調べ物をする時には、インターネットで検索するだけでなく専門的な書籍でも調べる必要がある。

エ 家族や友人から反対されたり批判されたりしても、自分がやりたいことはやるべきである。

問十四 —— 線⑨「認め合いの起きる場所」とありますが、これはどのような場所であるべきだと筆者は考えていますか。「〴〵場所。」に続くように、本文中から十字以上十五字以内で二つ探し、それぞれ抜き出して答えなさい。(73)

問十五 本文中の筆者の考えとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代では自然に距離を置き、自分の臓器も客観的に分析して改造しようとするが、それは生物の本質である未来を先取りする能力を発揮するためには必要な態度だ。

イ 人間と環境を切り離さず、すべてがつながりあって影響を与え合っていると考えて、人間以外の生物とも共存できるコミュニティを作るべきだ。

ウ 現代の日本では自然が破壊され、日本の原風景とでもいうべき照葉樹林の風景が失われてしまったが、それを復活させるために行動すべきだ。

エ 未来のコミュニティを作るにはそれぞれが個性を発揮でき、さらに互いに共感できる環境を整備すべきで、それにはグローバル化がますます必要になる。

